

仙人通信 83 三ツドッケ (1576m)

奥多摩日原には雲取山寄りに、芋ノ木ドッケ・黒ドッケ（西谷山）そして三ツドッケ（天目山）の3つのドッケ（突起）が川苔山に向い、扇状に尾根を張る。先般山梨100名山の高ドッキョウに登った通信で関東にあると言ってしまった手前もあり、三ツドッケに登ってみた。日原溪谷は萌黄色に山肌を染め、道路端には山桜・山吹・キケマンが春を奏でる。「ねねんぼう」と書かれた看板の横に一杯水（三ツドッケ）登山口の道標がある。お年よりの手招きを受け崖の上の登山道へと進む。狭いが日当りのよい道傍では、タチツボスマレ・ヤマエンコザクが迎えてくれた。15分程登ると赤い屋根の家の傍らで、草むしりをしていたお婆ちゃんが道を開けてくれた。「お元気ですね」とお礼方々立ち止まると、笑顔で「朝5時に起きて8軒の新聞配達をして6時に帰ってきた、若い者には負けないよ」ですって、素朴でうれしい。直ぐ先の日原トンネルの上は、山肌が大きく抉られ日原層の石灰岩の露天掘り現場である。天祖山から六つ石山を通る仏像構造線の東側に位置する日原層は、トンネル入り口の倉沢と日原の鍾乳洞の2つが在ることで有名だ。大きな藪椿の下を過ぎ、登山道は杉林の中の九十九折りとなる。白い雪洞状の三桎の花が薄暗い杉木立を明るくする。25分程で先程の採掘現場のフェンスとなる。フェンスと杉林の間を10分程登ると、真っ青の空が覗けるミズナラの尾根となる。やがて南斜面となり、杉木立と落葉樹の見通しの利かない境界を、ミスナラやブナ等の枯れ葉をカサコソと踏んで進む。40分間位過ぎると、緑の芽が出たばかりの唐松となり、梢越しに川苔山が望めた。間も無く杉木立が無くなり、粘板岩質の崖（倉沢層の堆積層）に刻まれた登山道となる。日当たりがよい崖には、枯葉を持ち上げ、あちこちでスマレ達が顔を出す。アカネスミレ・タチツボスマレ・白いスマレサイシン・元気なアケボノスマレ・乙女子が恋心を抱いて頬をほんのり赤く染め・下向き加減を連想させるエイザンスミレだ。心が躍り、疲れも吹き飛び、思わずシャッターを切った。やがて中西某先生を偲ぶレリーフのある痩せ尾根を通り過ぎ、広い尾根となる。ミズナラやブナの幹が1m以上もの朽ちた大木が横たわる異様な世界である。その様な中をカケスや背筋のピンとしたゴジュウカラが飛び交うのを見ていると、ケラが尽かさずドラムを叩きだした。ドラムよろしく叩いた朽ちた大木は、丸く啄ばんだ穴だらけで、見事さにただ感心した。登り初めて2時間35分で一杯水小屋に着く。小屋の左手の雲取・西谷山方面を指す道標に従い20分進み、三ツドッケと西谷を結ぶ尾根に出て、右手の山頂を目指した。登り初めて3時間10分で小さな山頂に着く。秩父三峰・雲で山頂を隠す雲取・七つ石・鷹巣・六つ石・御前・御岳・川苔・蕎麦粒山と武甲山までが一望できた。嘗て山頂の木々を無断で伐採し、NHKのニュースに取り上げられた株には、当局が調べた跡であろうか黄色いテープに一連番号が打たれていた。テープが貼られたアセビの株から、枝が50cm程に成長して、健気にも白い花をつけていた。{伐採は視界を良くしてくれ嬉しいが複雑・・・}。三ツドッケの由来は、岩峰が3つある由かと思ひ登っていたのだが、両隣に2峰を従えており納得した。帰路はその岩峰の1つを越えて小屋の横に降り、辿って来た道に戻った。登る時に見つけた山椒の新芽を積んで、6時間の早春の山路を満喫した。(h 2 1. 4. 1 6)

エイザンスミレ



山頂のアセビ



山頂

